

# コークにおけるフィーニアン蜂起, 1867年3月

高 神 信 一

キーワード：アイルランド独立運動, アイルランド系アメリカ人, フィーニアン, 蜂起

## はじめに

1801年にイギリスに併合されたアイルランドでは, 反英独立運動が組織化され, 1922年にアイルランド32州のうち南部26州は「アイルランド自由国」として「独立」した。この独立運動の中心となったのが, 「フィーニアン (Fenian)」たちであった。彼らは, アイルランドの独立を武装闘争によって獲得しようとした秘密組織「アイリッシュ・リパブリカン・ブラザーフッド (Irish Republican Brotherhood)」(以下, IRB と略す) のメンバーのことであり, その名前はアイルランドの古代の戦士にちなんでいる。IRB は1858年に設立され, 1867年3月5日に蜂起を決行した。蜂起そのものは失敗したが, IRB はその後も存続し, 1916年の「イースター蜂起」と, それに続く1919年から21年までの「独立戦争」では主導的な役割を果たしている。本稿は1867年蜂起を考察対象とする。蜂起が決行されたのは主として東部レンスター地方のダブリン州や, 南部マンスター地方のうちコーク州, リムリック州, ティペラリー州においてであり, 北部アルスター地方や西部コナハト地方では決行されなかった。本稿はコーク (コーク市およびコーク州) のフィーニアンの活動に焦点を当てることによって, 蜂起を明らかにする<sup>1)</sup>。

コークの蜂起にかんする研究は, ウォルター・マグラース (Walter McGrath) がアイルランドの軍事史研究誌『アイリッシュ・ソード』に発表した論文だけである<sup>2)</sup>。この論文は, 蜂起の100周年を記念して『イヴニング・エコー』紙に彼が投稿した蜂起に関する連載記事をまとめたものである<sup>3)</sup>。発表された論文はコークの蜂起研究の空白を埋める点において大いに評価されるべきものではあるが, 蜂起をフィーニアン蜂起全体のなか

---

† 大阪産業大学 経済学部 国際経済学科 教授

草 稿 提 出 日 11月24日

最終原稿提出日 2月25日

で位置づけておらず、さらにすべての史料、具体的にいえばアイルランド国立公文書館（National Archives of Ireland）やアイルランド国立図書館（National Library of Ireland）に所蔵された警察史料などを参照してはいない。このような研究状況を反映して、蜂起に焦点を当ててフィーニアン運動史を著述したレオン・オブロイン（Leon Ó Broin）は、コークの蜂起はダブリンの蜂起と同じパターンをたどったと述べたうえで、以下のように説明している。若者のグループが郊外の集合地点に向かってコーク市を出て行き、そのなかには蜂起を意味あるものにするため警察バロック（アイルランド警察の警官が居住していた）への攻撃を命じた者がいた。フィーニアンたちはイギリス軍兵士が自分たちに向かってくると敗走し、その多くが逮捕された<sup>4)</sup>。

だが、コークの蜂起はオブロインが記述した以上に複雑な様相を呈しているのである。本稿はアイルランド国立公文書館などの史料を参照しつつ、蜂起の全体像と関連づけながら、コークの蜂起を明らかにする。また、フィーニアン側の資料としては、J・F・X・オブライエン（J.F.X. O'Brien）<sup>5)</sup>とジョン・デヴォイ（John Devoy）<sup>6)</sup>の『回想録』を参考にする。

## 1. 蜂起への準備

まず蜂起が実行されるまでの経緯を簡単に説明しておこう。フィーニアン蜂起を主導したのはアイルランド系アメリカ人、とくにアイルランドからアメリカ合衆国に移民した後、アメリカ南北戦争（1861～65年）に従軍し、その後除隊した元兵士たちだった。ここでは彼らを「アメリカ人将校」と呼ぶことにする。彼らの中心人物が、南北戦争では北軍の大尉だったトマス・ケリー（Thomas Kelly）大佐（階級はIRBから与えられた）である。

ところでアメリカ人将校たちが蜂起を実行するために動き出したとき、IRBの最高指導者（Head Centre）はジェームズ・スティーブンス（James Stephens）であった。彼は1866年に警察の監視が厳しいアイルランドを脱出しアメリカに渡り、1866年内に蜂起を実行すると宣言し、アイルランド系アメリカ人の支持を喚起しようとしていた。ところが、12月になって蜂起準備が整っていないことを理由に、蜂起の延期を突然提案したのである。彼の側近だったアメリカ人将校たちは延期に強硬に反対し、スティーブンスをIRBの最高指導者の地位から排除するための画策をはじめた。まずケリー大佐たちは、アメリカ人将校ゴッドフリー・マッセー（Godfrey Massey）をイギリスに派遣し、イギリス国内に潜伏していたアメリカ人将校と連絡をとろうとした。彼らは蜂起のためにアイルランドへ来たものの、治安当局の厳しい監視体制を逃れるため、イギリスへ逃亡し蜂起実行の機会



を窺っていたのである。マッセーは蜂起のための資金550ポンドをもって、1867年1月11日にニューヨークを発ち、1月26日にリヴァプールに到着する<sup>7)</sup>。彼は後述するように、准将の階級を与えられ蜂起の司令官の役割を果たすことになる。

蜂起決行の中心人物ケリー大佐もまたアメリカからイギリスに渡る。彼は、1867年1月下旬にニューヨークからパリそしてロンドンに渡り、スティーブンスに代わってIRBの指導権を掌握しようとした。ケリー大佐は、アイルランドの各地方の代表者をロンドンに集め、2月10日に「アイルランド共和国臨時政府」を樹立し、その議長に就任することに成功した。ここにおいてケリー大佐は蜂起を決行するためにスティーブンスをIRBの最高指導者の地位から排除し組織を再編したのである。この臨時政府を構成したのは、アイルランドの4つの地域すなわちアルスター地方、コナハト地方、レンスター地方、マンスター地方の代表者たちだった。マンスター地方の代表は、コークのフィーニアン指導者ドミニック・マホニー(Dominick Mahony)である。さらに蜂起決行にあたってアメリカからケリー大佐とともにロンドンに渡ってきたグスタヴ・クリュズレ(Gustave Cluseret)将軍が最高司令官に任命された。彼はイタリアではガリバルディとともに戦い、南北戦争では北軍の准将となったフランス人である。アイルランド人ではない彼がフィーニアンを支援した理由は、抑圧されたアイルランド人を解放したいという考えからだった。クリュズレ将軍は自らの副官としてベルギー系イタリア人オクタヴ・ファリオラ(Octave Fariola)を推薦し、彼は参謀長として少将の階級が与えられることになった。また、蜂起のための資金をもってイギリスに渡ったマッセーには准将の階級が与えられ、さらにクリュズレ将軍がアイルランドに到着するまで、最高司令官代理となることが合わせて決定されている<sup>8)</sup>。

フィーニアンの蜂起計画を中心となって作成したのはクリュズレ将軍である。彼は、1866年後半からアメリカでフィーニアン指導者と接触しており、1万名の武装したフィーニアンが蜂起に参加するという前提のもとで計画を立案していた。計画の詳細については後述するが、その核心は船の乗り入れのための最重要地点や交通の要所を確保し、人びとの共感を隠れ蓑にし作戦行動をおこない、そして共同行動を速やかにとることによって、3カ月間でアイルランドに駐留する3万人のイギリス兵を撃破するというものだった<sup>9)</sup>。ところが、クリュズレ将軍が計画の前提としていた「1万名の武装したフィーニアン」は実際には組織に存在しなかったのである。1867年2月になってはじめてこの事実を知らされたクリュズレ将軍は、1万名の武装フィーニアンが集合するまでは、アイルランドに渡り指揮をとらないとケリー大佐に直接告げた。これに慌てたケリー大佐たちは、1万名ではなく5000名の武装フィーニアンで指揮をとるように懇願した。クリュズレ将軍は5000名

で作戦を開始しても運に恵まれれば、いくらかの打撃を与え武器を手に入れることができるかもしれないと考えたという。だが、実際に指揮をとることを確約せず、「準備」が整うまではアイルランドには赴かないということで両者は一応の決着をみたのである。クリュズレ將軍は2月15日頃にパリに行き、アイルランドに来ることはなかった<sup>10)</sup>。

とはいえ、蜂起計画は軍事専門家によって作成されたのだから、それを単なる「無謀な試み」として片付けることはできない。クリュズレ將軍の蜂起計画は、参謀長ファリオラ少將の力を借りていた。ファリオラ少將は蜂起における指令や指揮官の配置を決定するにあたり、アイルランドの地形を研究するとともに、イギリス軍の配備状況を調査していた<sup>11)</sup>。そのうえで作成された蜂起計画は二段階に分かれ、フィーニアンは第一段階では戦略上の拠点を確保したうえで、「ゲリラ戦」を展開し鉄道や幹線道路を不通にすることによってアイルランドを不安定化し、第二段階で「正規戦」をはじめるといったものだった。ゲリラ戦を開始するにあたっては、15名から20名の小集団で行動をはじめ、軍隊や警察との正面からの対決を禁じていた。軍隊などとの対決を避けながら、相手を攪乱させることを計画した。こうした状態を3カ月間続けることができれば、アイルランド系アメリカ人がアメリカ合衆国から援軍を派遣し、正規戦を開始できると考えていたのである<sup>12)</sup>。ゲリラ戦を開始するに先だって確保すべき拠点として最重要視されたのが、リムリック・ジャンクション駅だった。この駅は北東のダブリン、南西のクロンメル、ウォーターフォード、南のコークにつながる鉄道の要所だった<sup>13)</sup>。さらに、キルマロック（ダブリン・コーク間の鉄道の駅があり、リムリック・ジャンクション駅からコーク寄りに30キロメートルほどの地点）を最初に攻略することが指示された<sup>14)</sup>。

現地において指揮をとることを確約しなかったクリュズレ將軍に代わって、最高司令官代理として重要な任務を任されたのがマッセー准将である<sup>15)</sup>。彼は、臨時政府が設立された翌日の2月11日にケリー大佐によって蜂起準備を把握するためアイルランドへ派遣され、約2週間にわたる調査活動をおこない、2月24日にロンドンへ戻った<sup>16)</sup>。18日には彼はコーク市内でセンター（Centre）<sup>17)</sup>の集会に参加し、コークの組織の人数および武器数にかんしても情報を入手している。コークの蜂起に動員できる人数はコーク市およびその周辺が6000名、コーク州が1万5000名、武器数については1500あるいは1600（火器以外を含む）という報告を受けている<sup>18)</sup>。また、ライフルは150丁、拳銃は50丁あるいは60丁という証言もある<sup>19)</sup>。しかし、後述するようにコークのフィーニアンがこれほどの武器を所持していたとは考えられない。

アイルランドにおける調査を終えロンドンに戻ったマッセー准将には、新たな任務が待っていた。それは、蜂起決行日が3月5日に決定されたことを、アイルランドのフィー

ニアンに知らせることだった<sup>20)</sup>。マッセー准将はアイルランドにとんぼ返りし、まず2月26日に開かれたダブリンのセンターの会合で蜂起決行日を知らせ、3月1日にコーク市に到着した。翌2日アイルランド共和国臨時政府のマンスター地方代表ドミニック・マホニーに会った。マホニーはマッセー准将をコークのフィーニアン指導者の会合に連れていき、そこでマッセー准将は蜂起決行日を告げたのである<sup>21)</sup>。コークのフィーニアンが決行日を知ったのは、蜂起決行のわずか3日前のことだった。

コークのフィーニアンはどのような戦いを計画していたのであろうか。蜂起の基本計画はクリュズレ將軍によって作成されたが、各地域の計画はその地域の組織に任された。蜂起後の裁判で明らかになったコークの蜂起計画とは、コーク市のフィーニアンは市内の銃砲店から銃を、金物店からは草刈り鎌を強奪し、武装を強化し、全体の蜂起から1週間ほどたってコーク市内を攻撃するということだった。また、コーク州東部のフィーニアンは、コーク市の仲間たちと何らかの共同行動をとろうとしていた。さらに、ファリオラ少将が詳細なコーク市を攻撃する蜂起計画を作成し、かつ参加することになっていた<sup>22)</sup>。

各地のフィーニアン組織には、南北戦争で戦闘経験を積んだアメリカ人将校が指揮官として配置されることになっていた。コークにおける蜂起を指揮する予定だったアメリカ人将校は以下のとおりである。コーク州東部ミドルトン地区あるいはコーク州全域はパトリック・J・コンドン(Patrick J. Condon)大尉、ミドルトンはジョン・ジョセフ・コリドン(John Joseph Corydon)とジョン・マックルルーア(John McClure)大尉、ミルストリートはティモシー・デイシー(Timothy Deasy)大尉、キルマロックはダン(Dunne)大尉、ファーモイはジョイス(Joyce)、コーク市はウィリアム・マッケイ(William Mackey)大尉とマイケル・オブライエン(Michael O'Brien)大尉、カンタークはムーア(Moore)、マローはジェームズ・モーラン(James Moran)大佐であった<sup>23)</sup>。とくに注目しておきたいことは、コーク州東部あるいは全域の指揮官には、P・J・コンドン大尉が任命されていたということである。彼はコークの蜂起におけるもっとも重要な指揮官であったといえる。また、ミドルトンの指揮を割り当てられたジョン・ジョセフ・コリドンにも注目しておきたい。というのも彼は、蜂起決行の半年前から治安当局に情報を流していたスパイだったからである<sup>24)</sup>。

コークの蜂起の最重要人物コンドン大尉は、2月20日頃、マッセー准将と夕食をともにし、夜更けまで語り合っていたことが明らかになっている<sup>25)</sup>。この時点でコンドン大尉は蜂起の基本計画を知っていたにちがいない。そしてコークにおける蜂起計画の策定を開始したことは想像に難くない。ところが、コークのフィーニアンが蜂起決行日を知らされた3月2日に、コンドン大尉は、営業時間を過ぎたパブに立ち入った警官に偶然逮捕されて

しまったのである<sup>26)</sup>。当初警察は逮捕者の正体がわからなかったが、スパイのコリドンが「コークのフィーニアン司令官であるコンドン大尉」であることを通告してきた<sup>27)</sup>。

警察はコンドン大尉を逮捕したさいに所持していたメモを押収しており、これは彼が実施しようとした蜂起計画を知るうえで貴重な情報となる。そのメモには、「コーク・ヨール鉄道のヨール駅から午後5時の列車でキラーへ」と書かれてあり、さらに「月曜、バリーマコーダ」と記してあった<sup>28)</sup>。キラーおよびバリーマコーダともコーク州東部の地域であり、コンドン大尉がこの地域の蜂起計画に関与していたことを如実に語っている。このような重要な役割を担っていたコンドン大尉が蜂起直前に逮捕されたことは、コークのフィーニアンを混乱状態に陥れたことは容易に想像できよう。コンドン大尉がどこまで蜂起計画を策定していたのかはわからないが、たとえ逮捕前に十分な計画を立案していたとしてもフィーニアンを直接指揮することができなくなってしまったのである。

治安当局はコークの蜂起についてどの程度の情報を入手していたのであろうか。やはりスパイのコリドンが重要な情報源となっている。すでにみたように2月26日のダブリンのセンターたちの会合でマッセー准将は蜂起決行日を告げたが、コリドンはこの会合に参加しており、その事実を警察に直ちに通報した<sup>29)</sup>。この後、コリドンはコーク蜂起に関係する。コリドンはマッセー准将からコーク州ミルストリート行き、ケリー州の指揮官J・J・オコナー大佐に蜂起決行日を知らせるように命じられた。そこで彼はミルストリートに行ったが、オコナー大佐には会えず、その地のフィーニアンからコーク市に行くように助言された。コリドンは3月1日にコーク市に着き、翌2日の夕方コンドン大尉などのアメリカ人将校たちと会った。そしてコリドンはコンドン大尉から、オコナー大佐に蜂起決行日を伝達するという命令を撤回され、後にみるようにマックルーア大尉と行動を共にしたエドワード・ケリー（Edward Kelly）とともにミドルトンへ行き、そこでの蜂起を指揮せよという命令を受けたのである。さらに、彼はコーク・ヨール鉄道の駅があるキラーの近くにあるバリーマコーダにいるマックルーア大尉と連絡をとるようにも命令されている<sup>30)</sup>。

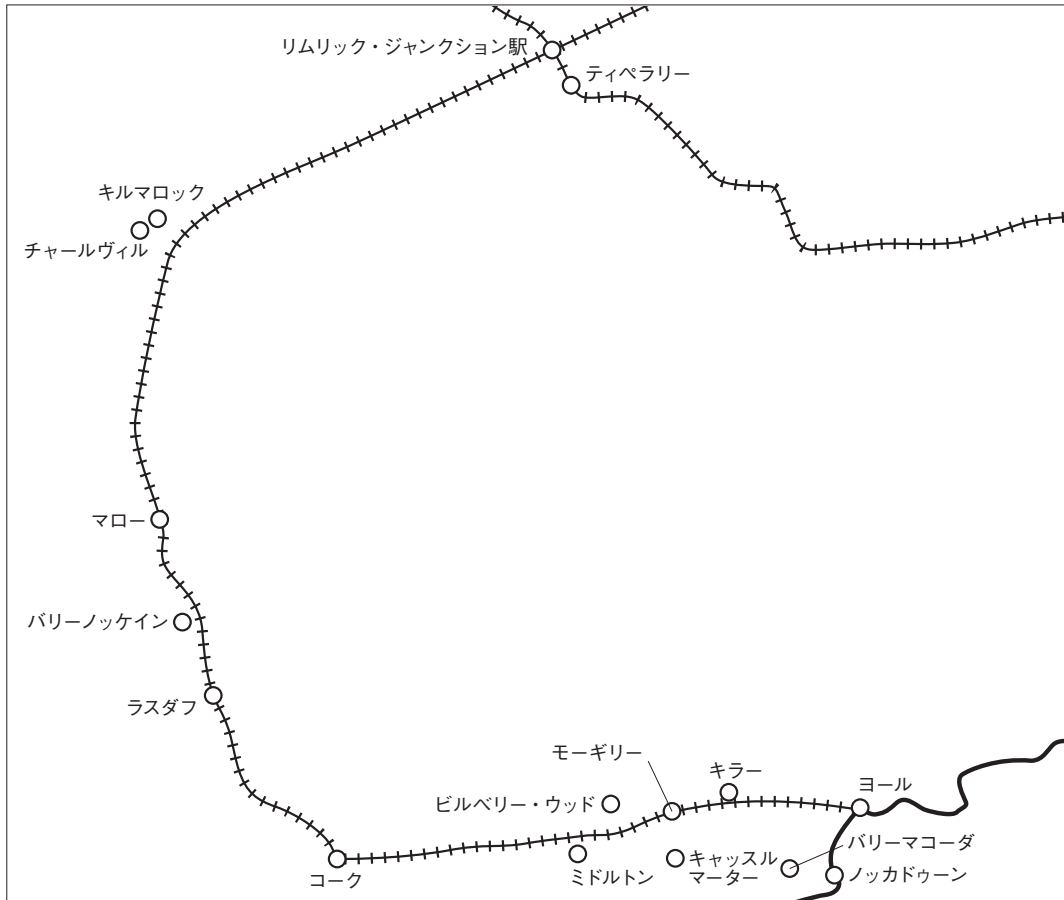
3月2日のコンドン大尉の逮捕から一夜明けた3日の夕方、コリドンは、アイルランド警察のコーク市を管轄しているトマス・ハミルトン（Thomas Hamilton）警部補に会い、逮捕者がコンドン大尉であることを告げるとともに、蜂起についての情報を提供した。3月4日にハミルトン警部補は、フィーニアン蜂起がアルスター地方を除く3つの地方で5日午前0時に決行されると報告している<sup>31)</sup>。いっぽう、コリドンは「ミドルトンに行き蜂起を指揮せよ」というフィーニアン指導部からの指令に背き、4日午前8時の列車でコークを出発しダブリンに向かった。その途中リムリック・ジャンクション駅でマッセー准将の従者と偶然会い、マッセー准将が同日にこの駅にやって来ることを知った。コリドンは

ダブリンに到着すると、治安当局にマッセー准将の動きを通報し、これが彼の逮捕へとつながっていくのである。じじつ、4日治安当局は、リムリック・ジャンクション駅に降り立ったマッセー准将を逮捕し、彼を直ちにダブリンに移送した。蜂起の最高司令官の役割を担ったマッセー准将が蜂起決行前に逮捕されたことは、蜂起を大きく狂わせていく<sup>32)</sup>。マッセー准将が蜂起の中心人物であることは、3月1日の時点でコリドンなどからの情報によってアイルランド担当次官(アイルランド担当大臣を補佐する、アイルランド政府の実質的な責任者)トマス・ラーコム(Thomas Larcom)はすでにつかんでいた<sup>33)</sup>。そればかりではなく彼は3月3日の時点においてフィーニアン蜂起が3月5日に決行される可能性に言及し、さらにリムリック・ジャンクション駅を防御するためにイギリス軍を待機させる必要があると軍当局に述べている<sup>34)</sup>。

コークの蜂起についてはコリドンは詳しく知らなかったようで、詳細な情報はアイルランド警察のコーク市のハミルトン警部補やコーク市長、ジョン・クローニン(John Cronin)居住治安判事が入手している。前述したように、3月4日にハミルトン警部補は、フィーニアン蜂起がアルスター地方を除く3つの地方で5日午前0時に決行されると報告し、5日にはコーク市長やクローニン居住治安判事は、蜂起が今夜決行され銃砲店が攻撃されるという匿名情報などを入手した<sup>35)</sup>。そこで治安当局は市内の要所には軍隊を配置し、それぞれの銃砲店には第60ライフル連隊の兵士を分けて配置し、騎馬警官に市内を巡回させるなどコーク市の警備を固めた<sup>36)</sup>。このように治安当局は、コーク市において3月5日において蜂起が決行され、銃砲店が攻撃されるという情報にもとづいて市内の防御策を講じた。

それでは蜂起が決行された3月5日および6日にコーク市およびコーク州におこったことをみることにしよう。コークのフィーニアンを蜂起のさいにとった行動から大きく4つのグループに分類することができる。第1は、コーク市の郊外に集合した後、マロー(市内から30キロメートルほど北に位置する)を目指し北上し、その途中でバリーノッケインの警察バラックを攻撃したグループである。このグループの人数はコークの蜂起において最大であった。第2は、ティモシー・デイリー(Timothy Daly)に率いられたミドルトンのフィーニアンを中核とするグループで、彼らはキャッスルマター警察バラックを攻撃した。第3は、ノッカドゥーンの沿岸警備隊基地を攻撃したマックルーア大尉を指揮官とするグループで、ミドルトンのフィーニアンと共同行動をとる予定であった。第4は、ダン大尉に率いられたチャールヴィルのフィーニアンで、彼らはリムリックの仲間たちとともにキルマロックの警察バラックを攻撃した。





コークにおけるフィーニアン蜂起 1867年3月

## 2. バリーノッケインの警察バラックへの攻撃

コーク市では5日の夜、市の北側に向かっていくフィーニアンが目撃された。こうした行動に参加した2名のフィーニアンの証言がある。ひとり、蜂起をめぐる裁判において証人となったマイケル・マッカーシー（Michael M'Carthy）である。もうひとり、警察バラックへの攻撃を指揮し死刑判決を受けたものの、その後に減刑され『回想録』を書き残しているJ・F・X・オブライエンである。

マッカーシーはコーク市内で運搬人夫として働いていた。彼は蜂起当日に仲間のフィーニアンからコーク市の南西にあるビショップ通りに夜遅くに集合するようにいわれた。じっさい午後11時に集合場所に行くと、すでに50名から60名の男たちが集合していた。そ



してマッカーシーたちはカレッジ・ロード近くの野原で軍隊のように整列し、2名のリーダーのもとで行進をはじめた。彼らの目的地はコーク市の北側にあるプレイヤー・ヒルだった。プレイヤー・ヒルこそがコーク市のフィーニアンの集合地点である。彼らはプレイヤー・ヒル近くのブラニー・ロードに到着し、他のグループと合流したという。この時点でグループの総人数は約2000名を数えたという<sup>37)</sup>。

プレイヤー・ヒルには、警察バロック攻撃のもうひとりの証人であるJ・F・X・オブライエンは辻馬車に乗って到着した<sup>38)</sup>。オブライエンによれば、1500名から1800名のフィーニアンが集合していた。マッカーシーはプレイヤー・ヒルに集合した人数を2000名とし、オブライエンは1500名から1800名としているので、2000名を超えないフィーニアンが集合したと推定できよう。またオブライエンは、他のルートから二つのグループが加わって総勢5000名のグループになると仲間から告げられた<sup>39)</sup>。しかし、新たに二つのグループが集合したという証拠はない。この集合しなかった二つのグループはコーク市の南側に集合したフィーニアンであった可能性が高い<sup>40)</sup>。オブライエンはプレイヤー・ヒルに集合したグループの武装状態について語っており、2丁の猟銃、1丁のライフル、5丁の拳銃、18本の槍が武器のすべてであったという<sup>41)</sup>。フィーニアンの武装状態がいかに貧弱であったかがよくわかる。

J・F・X・オブライエンによれば、プレイヤー・ヒルにおいて自分たちを率いる指揮官を待ったという。一時間ほど待ったが、指揮官は現れなかった。そうしたなかマローにフィーニアンの武器庫があると主張する者があり、そこへ向かおうということになったという<sup>42)</sup>。マローに向かうという行動は蜂起計画の一環ではなく、その場の「思いつき」であった。フィーニアンは詳細な計画も知らぬまま、行動を開始したのである。グループを統率する指揮官がいなかったため、規律のとれていない行進が続いていたという。一時間ほど行進したところで、オブライエンは、集団のなかにマイケル・オブライエン大尉とウィリアム・マッケイ大尉という2名のアメリカ人将校をみつけた。そこでJ・F・X・オブライエンはこの二人に、このグループの規律のとれていない嘆かわしい状態を訴え、指揮をとるように頼んだ。だが、二人が断ったため、仕方なく自らが指揮官となったという。オブライエンはコークの組織においては一目置かれた人物だったとはいえ、戦闘経験のない一般人であった。ここで注目しておきたいことは、先にみたように蜂起計画ではコーク市の蜂起を指揮するアメリカ人将校のマッケイ大尉とマイケル・オブライエン大尉がその場にいたにもかかわらず、両者とも指揮をとらず、オブライエンが突如として指揮官となったことである。明らかに蜂起計画に混乱が生じていたことがわかる。ともかく指揮官となったオブライエンは数百人に対して4列で行進するように命令した<sup>43)</sup>。

午前6時から7時の間にフィーニアンはブラーニーを過ぎ、バーチ・ヒルにある屋敷に押し入った。屋敷の主人の話によるとライフル銃や拳銃、剣で武装した50名から60名が押し入り、数分の間に猟銃や拳銃、犁、干し草用熊手を奪い去っていったという<sup>44)</sup>。また、治安当局は、武装した50名から60名が屋敷に押し入ったいっぽう、外には500名から600名が待機していたと報告している。このグループがバリーノッケインの警察バラックを襲撃するのである<sup>45)</sup>。前述したようにプレーヤー・ヒルには2000名を超えないフィーニアンが集合していたとすると、マローへの行進への参加者はその3分の1程度ということになる。リーダーが現れなかったなかで、脱落していったフィーニアンがいたのであろう。

午前7時頃、ラスダフ駅の駅員は、襲撃された屋敷からマロー方向に向かってやって来る多数の男たちを目撃した。彼はその人数を300名だと証言している<sup>46)</sup>。彼らは一時間半ほどその場に留まり、線路を寸断し、電信線を切断し、電柱を引き倒したという<sup>47)</sup>。じっさい、コーク駅を午前8時に出発したダブリン行列車が現場に到着したときには、線路が持ち上げられ列車の通過が不可能となっていた<sup>48)</sup>。鉄道員が線路を修復しようとする、少人数のグループが列車に近付き、鉄道員を撃とうとしたので、列車は全速力でコーク駅に引き返していった<sup>49)</sup>。

線路の破壊工作をおこなったフィーニアンは、午前8時から9時の間にバリーノッケインの警察バラックから800メートルほどの地点に到着したところで、今後の行動を協議した。その結果、マッケイ大尉が率いる50名が攻撃部隊を編成し主力部隊から別れて警察バラックを攻撃することになり、主力部隊は彼らの帰りを待つことになった。この警察バラックへの攻撃は、周到に練られた計画の一端ではなかったことは注意しておきたい。J・F・X・オブライエンは自ら志願し攻撃部隊に入り、もう一人の証言者マッカーシーは攻撃には参加せず、警察バラックから煙と炎が上がるのをみることになる<sup>50)</sup>。

バリーノッケインの警察バラックは間口が1メートルほどの2階建てで道路から少し入った所にあり、5名の警官が駐在していた。攻撃部隊に加わったオブライエンは、警察バラックから100メートルほど離れた場所に来たとき、警官が警察バラックに入り、扉を閉めるのをみた<sup>51)</sup>。警察バラックに駐在していた警官の証言によれば、銃や槍、ピストルで武装した「150名」が攻撃を仕掛けてきたのは、午前10時15分頃だった<sup>52)</sup>。先にみたように、オブライエンは攻撃した人数を「50名」としており、警官の主張する「150名」とは食い違いをみせている。警官は警察バラックを明け渡してしまった責任を逃れるためにもフィーニアンの脅威を誇張したと考えられるので、オブライエンの主張する「50名」のほうが信用できよう。

マッケイ大尉が警察バラックのドアをノックした。警官が「そこにいるのは誰だ」と聞

くと、彼は「アイルランド共和国の名のもとに降伏せよ」と要求した。警官たちは要求を拒絶し、発砲した。マッケイ大尉は警察バロックのなかに押し入ることを一旦は諦めようとしたが、J・F・X・オブライエンが「背を向けるのは恥である」といって、攻撃を続けるよう促したので思いとどまったという<sup>53)</sup>。このことからわかるように、フィーニアンは警察バロックを攻略することを重視してはおらず、その攻略はそもそも蜂起計画には存在しなかったのである。また、彼らは攻撃を長引かせたくなかった。というのも、警察バロックで火災がおき、近隣の家から男がマロー方向へ馬を走らせていくのを目撃したからである<sup>54)</sup>。彼らは、この男の知らせを聞いた治安当局が軍隊や警察の応援部隊を派遣することを危惧したのだった。

フィーニアンは警察バロックの1階正面のドアを壊し押し入った。警官たちによれば、彼らは2階に避難したが、警察バロック内で火災が発生し、煙が2階の部屋に上がってきたという<sup>55)</sup>。火の勢いが増すなかでフィーニアンは警官に降伏し武器を手渡すよう要求した。火災による身の危険を感じた警官たちは降伏し、警察バロックの外に出た。フィーニアンのなかには彼らを捕虜として連れて行くことを主張する者もいたが、彼らから武器を奪った後に解放した。その後フィーニアンは警察バロックから6キロメートルほど離れた高台のボトル・ヒルへ移動していった。彼らはこの丘に上ることによって、他のルートでコーク市を出発したグループの動きがみえるかもしれないと考えたからだった<sup>56)</sup>。

フィーニアンがボトル・ヒルに到着し休息していると、午前11時頃にマロー方向からイギリス軍兵士たちが現れた。オブライエンは、「武装していないわれわれは、逃げるしかなかった」と『回想録』に記している<sup>57)</sup>。このイギリス軍兵士たちは、マローから派遣された第71連隊の50名である。彼らは、警察バロックが炎上しているという情報を入手したため、警官とともに特別列車に乗り現場に急行したのである。イギリス軍兵士とともにボトル・ヒルに到着した警官の証言によれば、戦闘隊形をとっているかのような一団がいたという。また多数の男たちが丘を上がり、この一団と合流しようとしていた。彼らは兵士や警官に数発撃ってきたが、第71連隊の前衛隊が応射すると逃げ出したという。警官がボトル・ヒルの頂上に立つと、フィーニアンはグループに分かれ逃げていくのが目撃された<sup>58)</sup>。4名のフィーニアンを逮捕したが、いずれもコーク市で働いていた者たちであった<sup>59)</sup>。いずれにせよフィーニアンは混乱し、少人数の集団となって逃げ出したのである。

多くのフィーニアンはコーク市に向かって逃走し、無事に自宅にたどり着くことができた。だが、なかには前述した確保すべき重要地点とされたりムリック・ジャンクション駅を目指した者がいた。J・F・X・オブライエンはそのひとりである。彼は先にみたように、この駅が蜂起計画のなかで重要視されていたことを知っていたので、そうした行動をとっ

たのである。だが、彼はグループを率いてそのようにしたのではなく、彼に同行したのはひとりの若者だけだった<sup>60)</sup>。このことからわかるように、リムリック・ジャンクション駅は、オブライエンが率いたグループの目的地ではなかったのである。そのいっぽう、警察バラック攻撃のもうひとりの証言者マッカーシーはコーク市に戻っていった<sup>61)</sup>。ここで興味深いのは、マッカーシーが、警察バラック攻撃に主導的役割を果たしたマッケイ大尉と行動を共にしていたということである。マッカーシーによれば、マッケイ大尉もまたリムリック・ジャンクション駅の重要性を知っていたので、はじめはそこへ向かうことを主張したが、仲間に説得されコーク市に戻り様子をみるという行動を選択した。結局マッケイ大尉はリムリック・ジャンクション駅には行かなかった<sup>62)</sup>。

いずれにせよ、プレーヤー・ヒルに集合したフィーニアンは、蜂起における自らの役割も知らぬままマローを目指し、その途中バリーノッケインの警察バラックを攻撃した。彼らは警官を降伏させ武器を獲得したが、警察バラックへの攻撃によって治安当局の注意を引き、イギリス軍と直接対峙することになってしまった。イギリス軍に比べて武装が著しく劣っていたフィーニアンは、兵士の前から逃げ出すしかなかったのである。蜂起計画を知らなかった彼らにゲリラ戦の遂行を期待することなどどだい無理な話だった。

### 3. キャッスルマーターの警察バラックへの攻撃

コーク州東部にあるクロイン、ミドルトン、キャッスルマーター、バリーマコーダは、蜂起前よりフィーニアンの拠点として知られており、警察は、蜂起が最初に決行されるとすればこの地域であると予想していた<sup>63)</sup>。前述したように警察のスパイ、コリドンはエドワード・ケリーとともにミドルトンへ行き、そこでの蜂起を指揮することになっていた。さらに、彼はバリーマコーダにいるマックルーア大尉とも連絡をとるように命じられていた。このようにコーク州東部のフィーニアンは、蜂起において共同行動をとることを計画していた。ところが、すでにみたようにコーク州全体あるいは東部（ミドルトン地区）を指揮する予定だったコンドン大尉は3月2日にコーク市内で逮捕され、ミドルトンの指揮を任されていたはずのスパイのコリドンは任務を放棄しダブリンに行き、蜂起にかんする情報を治安当局に流した。このことからわかるように、この地域の蜂起もまた決行前から失敗が運命づけられていたといえるかもしれない。

ミドルトンの住民が異変に気付いたのは5日午後8時頃だった。いくつかのグループがいつもは静かな通りを行進し、午後9時になると通りを歩く人数はさらに増えたという<sup>64)</sup>。午後9時前には、ミドルトンの警察バラックに駐在していた4名の警官が町のパト

ロールをはじめていた。彼らは午後10時15分頃に警察バラックに一旦戻り、警察バラックから400メートルほど離れたコーク・ロードに30名あるいは40名を目撃したと報告し、再びパトロールに出た<sup>65)</sup>。警官たちはコーク・ロードに「30名あるいは40名」を目撃したと報告しているが、じっさいの人数はそれよりも多かった可能性がある。新聞報道によれば、午後10時頃、約300名がコーク・ロードの町はずれに集合していたとされている。また、彼らがコークとミドルトン間の電信線を切断したことも報道している。さらに、「武装した60名」ほどが主力部隊から離れ、町の中心を3列になって行進していたという証言もある<sup>66)</sup>。この「60名」が午後11時前にパトロール中の警官と遭遇した。グループの先頭にいたティモシー・デイリーが「アイルランド共和国の名のもとに」降伏するように告げた。デイリーはミドルトンに居住するフィーニアン指導者で、職業は大工だった。

ところで先にみたように、ミドルトンのフィーニアンを指揮する任務を命じられていたアメリカ人将校は、スパイのコリドンとマックルーア大尉であった。マックルーア大尉は後述するノッカドゥーンの沿岸警備隊基地の攻撃に参加しているため、コリドンがミドルトンのフィーニアンを指揮する予定であったことが推測される。そのコリドンが蜂起決行前日の4日にダブリンに行ってしまったことはすでに述べたとおりである。ミドルトンのフィーニアンは、現れるはずもないコリドンの到着を待っていたにちがいない。コリドンが現れなかったため、アメリカ人将校ではないデイリーがやむを得ず攻撃を指揮することになったと考えられる。デイリーにとって重すぎる負担であったろう。

デイリーは警官たちに降伏するよう要求したが、その要求が拒絶されたため、フィーニアンは彼らに向かって銃撃を開始した<sup>67)</sup>。この銃撃は規律のとれた軍隊のようだったと新聞に報道されている<sup>68)</sup>。フィーニアンによる銃撃によって警官1名が射殺されたが、その他の警官たちは逃げおおせた<sup>69)</sup>。そしてフィーニアンはミドルトンの警察バラックを攻撃せずにキャッスルマターに向かって去っていった<sup>70)</sup>。警察バラックの攻撃は彼らの目的ではなかったのである。デイリーに率いられたフィーニアンがキャッスルマターに到着したのは午前2時である<sup>71)</sup>。彼らは、キャッスルマターの町に入る前に、干し草に火を付け警察バラックから警官をおびき出そうとした。そうこうするうちにデイリーたちに、キラーからのグループが合流した<sup>72)</sup>。このときの人数が約120名だったという情報がある。この人数については、正確な人数は暗闇のためにわからないと断りながらも、500名だったという新聞報道もある<sup>73)</sup>。そして銃を持つ者、槍などを持つ者、武器を持たない者の順に並んで、キャッスルマターの町に入って行ったのである<sup>74)</sup>。

午前2時15分、フィーニアンは、5名の警官が駐在していたキャッスルマターの警察バラックへの攻撃を開始した。警官は、干し草が燃えているという報告を受け、それが



フィーニアン蜂起の一環だと考えたので、すでに戦闘態勢に入っていた。フィーニアンは裏目に出了といえよう。多数の男たちが行進してきたので、警察バラック内の警官たちはドアを固く閉め、窓を開け、明かりを消した。フィーニアンがドアを三度強く叩いたところ、警官は銃撃を開始した。すると彼らは反撃せずに退却していった。警官は警察バラックの外に出て、彼らの追跡をはじめたが、橋まで来るとそこには障害物が置いてあり、これ以上の追跡は賢明ではないと考えて追跡を中止した。警察バラックから50メートルほど離れた場所には、死体があった。ミドルトンからフィーニアンを率いてきたデイルーだった<sup>75)</sup>。

ところで警察バラックの攻撃を中止したフィーニアンたちは、どこへ行ったのであろうか。警察バラック攻撃の一報は、午前5時半にキャッスルマーターの警官からヨールの警察のもとに届いた。そこで第67連隊の2名の将校と43名の兵士と2名の警官が特別列車に乗りモギーリーまで行き、そこからキャッスルマーターまで急行し事情を調査した。その結果、キャッスルマーターから3キロメートルほど離れたキラの南側の丘に2000名のフィーニアンが集合しているという報告を受けた。だが、その地点へ向かったものの、フィーニアンが集合していた痕跡は認められなかった<sup>76)</sup>。治安当局がフィーニアンがキラの南側の丘に行ったという確証を得られなかったとはいえ、彼らが少なくともキラの方向に向かっていった可能性は高い。というのも、キラは後述するノッカドゥーンの沿岸警備隊基地を攻撃したグループも目指した場所であり、コーク州東部のフィーニアンの集合地点であったと推測できるからである。それだけにキラへの移動は重要な意味を帯びてくる。集合地点としてのキラについての考察はひとまず置くこととし、ミドルトン地区の指揮を割り当てられたもうひとりのアメリカ人将校マックルーア大尉の行動に焦点を当ててみよう。

#### 4. ノッカドゥーンの沿岸警備隊基地

5日午後9時半にノッカドゥーンにある沿岸警備隊基地（5名の隊員が駐在）が、ライフル銃や剣、槍などで武装した60名のフィーニアンによって襲撃された<sup>77)</sup>。デヴォイによれば、この基地を襲撃したのは、ピーター・オニール・クロウリー（Peter O'Neill Crowley）をセンターとするバリーマコーダのフィーニアンだった。彼らは100名のメンバーを擁するサークルを構成し全員が蜂起に参加したといわれるが、武装は貧弱であったという。彼らを指揮したのがアメリカ人将校マックルーア大尉だった<sup>78)</sup>。マックルーア大尉とクロウリーは基地の前に行き、マックルーア大尉が歩哨に銃を突きつけ、彼の銃を奪っ



た。基地のドアには鍵がかかっておらず、隊員たちがみな寝入っていたため容易に中に入れたという<sup>79)</sup>。後に裁判の証言台に立った隊員は、マックルーア大尉に率いられたフィーニアンが押し入ってきたのは午後9時半頃だったと述べている<sup>80)</sup>。結局、隊員たちは降伏し武器を奪われ捕虜となり、フィーニアンとともに行進をはじめることになった。

この一団は、他のグループと合流する集合地点を目指していった。この集合地点についてデヴォイは、マックルーア大尉の受けた命令はヨールに向かう鉄道の「ある地点」に行き、他のグループを待つことであったが、誰も現れなかったと述べている<sup>81)</sup>。デヴォイのいう「ある地点」とはキリーのことであろう。なぜならば彼らはバリーマコーダに行きそこからキリーに向かって移動をはじめ、キリーの近くの小道を行進したところで、「解散」を命じられその場で2時間ほど待機していたことがわかっているからだ。デヴォイは「誰も現れなかった」と記述しているが、捕虜となった隊員の証言によれば、キリーの方向から2名の男がやって来たという。おそらくこの2名はエドワード・ケリーをリーダーとするグループのメンバーであり、ここにおいて2つのグループが合流したと考えられる。だが、ケリーのグループは総勢14名の少人数であった<sup>82)</sup>。ところでケリーは先にみたように、コリドンとともにミドルトンへ行き、「そこでの蜂起を指揮せよ」という命令を受けていたフィーニアンである。

キリーでケリーのグループと合流したにもかかわらず、デヴォイが「誰も現れなかった」と記述していることからすると、合流する予定であったグループはより人数の大きいグループであったことが推測できる。じっさい、マックルーア大尉たちは、他のグループの動向を把握するために、馬に乗ったトマス・カリナン(Thomas Cullinane)を単独でキャッスルマター方面に偵察として放った。すなわち彼らはキャッスルマターの警察バラックを攻撃したデイリーたちのグループとの合流を探っていたのである。偵察から戻って来たカリナンが、軍や警察には出会わなかったと報告したので、マックルーア大尉たちはキリーを通り抜けずにキャッスルマター方面へ前進することになった<sup>83)</sup>。午前6時頃カリナンが再び偵察に向い、キャッスルマターは平穏であるという情報を持ち帰ったが、合流すべき仲間の動向は不明のままだった<sup>84)</sup>。マックルーア大尉たちはキャッスルマターへさらに前進し、町の様子を探るためにカリナンを3度目の偵察に派遣した。だが、カリナンは戻ってはこなかった。というのも、彼はキャッスルマターの警察バラックを過ぎたところで逮捕されてしまったからだ<sup>85)</sup>。マックルーア大尉たちは、カリナンが戻らないなかで、キャッスルマターでの攻撃の失敗を聞き、キャッスルマターへの前進を中止した。そして午前6時半頃、モギーリー付近で捕虜としていた隊員たちを解放した<sup>86)</sup>。この時点で60名いたフィーニアンの人数は20名に減少していたという<sup>87)</sup>。残り

の40名のフィーニアン<sup>88)</sup>の消息についてはわからない。

デヴォイは、沿岸警備隊の隊員たちを解放した後のマックルーア大尉たちの足取りを『回想録』に記述している<sup>88)</sup>。キャッスルマーター付近からマックルーア大尉たちがどのような経路をたどったのかは不明だが、『回想録』には彼らが小山の頂上にある小さな森で待機していたことが書かれてある。この小山がどこにあるのかは『回想録』からはわからない。デヴォイによれば、待機していた彼らが夜明け頃に最初に目にしたのは、止められる予定であったコーク市発の列車だった。その列車が停車すると、250名の兵士と警官からなる遊撃隊が降りて、マックルーア大尉たちの隠れていた方向へ向かってきたという。そこでマックルーア大尉とクロウリーは協議し、ライフルを所持している10名以外は解散することになり、武器を所持していなかったフィーニアンは自宅に戻っていったという。

マックルーア大尉たちの行動については、デヴォイの『回想録』以外に前述したエドワード・ケリーが残したメモが手掛かりを与えてくれる<sup>89)</sup>。このメモによれば、ケリーたちがキャッスルマーターの北西に位置するビルベリー・ウッドで野営をしていたところ、ミドルトンのグループの一員だった鍛冶工が加わり、彼からミドルトンのフィーニアン指導者デイリーが撃たれたという情報を知らされた。おそらくビルベリー・ウッドがデヴォイのいう「小山」であろう。ケリーのメモによれば、午後1時に100名の兵士たちが、反対側の丘でマックルーア大尉たちを搜索していたので、彼らは戦意を喪失したという。ところでデヴォイは、コーク市発の始発列車から降りた250名の兵士たちがマックルーア大尉たちの隠れている場所に向かってきたので、解散したと述べているのに対して、ケリーは午後1時に100名の兵士たちが搜索活動をおこなっていることを知ったので解散したとしている。コーク市発の始発列車に250名の兵士たちが乗っていたということを裏付ける情報は見当たらない。いっぽう、前述したようにキャッスルマーターから3キロメートルほど離れた丘を第67連隊の兵士たちが搜索していた。このことはケリーが主張している事実と合致している。したがってケリーの記述のほうが、デヴォイの『回想録』よりも信用できよう。

マックルーア大尉のグループはキャッスルマーターの北西にあるビルベリー・ウッドで待機していたが、彼らが探し求めていたキャッスルマーターの警察バラックを攻撃したフィーニアンとは合流することができなかった。後者のグループの行動については、先にみたケリーの南側の丘に集合していたという情報だけである。その丘に派遣された兵士たちはフィーニアンが集合していた証拠を発見することはできなかった。そうであれば、キャッスルマーターの警察バラックを攻撃したグループは解散して自宅に戻っていったのかもしれない。だが、治安当局がケリーの南側の丘で徹底的な搜索をおこなったわけでは

ないので、フィーニアンが集合していた可能性を完全に排除することはできない。したがって、キリーの南側の丘に彼らが集合していたという情報が正しかったと仮定すれば、合流すべき二つのグループは別の場所で待機していたことになる。いずれにせよ二つのグループは合流に失敗したのである。

ところでキラーに集合予定であったフィーニアンは、どのような作戦を遂行しようとしていたのだろうか。考えられる行動は、コーク市内からイギリス軍を誘い出し、コーク市内の攻撃を側面から支援することである。というのも、ダブリンの蜂起ではフィーニアンはダブリン市の郊外に集合することによってイギリス軍を市内から誘い出し、市内の攻撃を容易にすることを計画していたからである<sup>90)</sup>。いずれにせよ、コーク州東部のフィーニアンはキリーでの集合に失敗した。その合流失敗の明確な理由はつまびらかではないが、キャッスルマーターのグループを率いたデイリーが射殺されたため、グループが混乱していたことは理由のひとつかもしれない。武器を所持していたマックルーア大尉たちはその後も逃亡を3週間ほど続け、3月31日に彼らはイギリス軍に取り囲まれた。エドワード・ケリーとマックルーア大尉は逮捕され、クロウリーは逮捕のさいに重傷を負いまもなく死亡した<sup>91)</sup>。マックルーア大尉やケリーの逮捕およびクロウリーの死によって、コーク州東部の蜂起は完全に終わったのである。

## 5. キルマロックの警察バラック

キルマロックの警察バラックはリムリック州に位置するが、この警察バラックの攻撃にはコーク州チャールヴィル(リムリック州との境界近くにある)のフィーニアンが関わっていた<sup>92)</sup>。さらに前述したように、キルマロックを最初に攻略することをフィーニアンが計画しており、コークの蜂起との関連でも注目する必要がある。そこで本稿ではリムリック州キルマロックの警察バラックへの攻撃を扱うことにする。

6日午前6時頃、濃い緑色の軍服に身を包み、帽子に羽を付けたダン大尉に率いられたフィーニアンが警察バラックを取り囲んでいた。警察バラックには15名の警官とその家族(4名の女性、11名の子供)が駐在していた<sup>93)</sup>。ダン大尉はキルマロックの警察バラックを攻撃したフィーニアンの指揮官だが、彼はチャールヴィルに本拠を置いて蜂起の準備をすすめていた<sup>94)</sup>。ところでダン大尉は警察バラックへの攻撃開始には「ためらい」があった。というのは、6日午前3時頃に、キルマロックに郵便列車が近づく音が聞こえたとき、ダン大尉は、線路を破壊するという蜂起計画の一端が失敗し、蜂起が計画通りに進んでいないことを悟ったからだ<sup>95)</sup>。

フィーニアンが線路の破壊工作をおこなっていたことは事実である。5日午後11時から12時の間に、リムリック・ジャンクション駅とキルマロックのほぼ中間に位置するノックロン駅の周辺の線路の一部が破壊され、電信線も切断されていた<sup>96)</sup>。だが、破壊された線路の修復にリムリック・ジャンクション駅から鉄道員が派遣され、午前4時には列車が通過できるようになった。そのため、ダブリンを出発し午前2時にコーク駅に到着するはずであった列車は午前6時にコーク駅に到着した。また、コーク駅発のダブリン行列車は午前0時にリムリック・ジャンクション駅に到着予定であったが、遅れはしたものの、現場を無事通過することができたのである<sup>97)</sup>。ダン大尉に蜂起が予定どおりにすすんでいないと思わせた列車は、前述した列車のいずれかであろう。ダン大尉は線路の破壊工作が失敗に終わったと考え攻撃の中止を提案したが、フィーニアンはダン大尉を臆病者だと嘲い、ダン大尉は仕方なく攻撃を率いたという<sup>98)</sup>。このことを蜂起後に治安当局も把握しており、ダン大尉はキルマロックで戦いたくはなかったが、戦うように強いられたと報告している<sup>99)</sup>。それではキルマロックの警察バラックの攻撃の様子をみることにしよう。

警察バラックに駐在していた警官の証言によれば、午前5時45分頃に警察バラックのドアをたたく音がし、フィーニアンが銃撃をはじめたという。警官たちは時折銃を発射して応戦し、活発な銃撃戦が約30分間続いた。そしてその後はフィーニアン、警官双方とも間隔を置きながらの銃撃戦となった<sup>100)</sup>。こうしたなかで午前8時に、キルフィネインの警察バラックに駐在するオリヴァー・ミリング (Oliver Milling) 警部補が10名の部下とともに到着した<sup>101)</sup>。ミリング警部補らは警察バラックの背後から近付くと、24名から30名の男たちが槍を持って立っていた。警官がフィーニアンに向かって銃撃すると、2名あるいは3名が倒れ、他の者たちは槍などをその場に捨てて逃げていった。警察バラックにいた警官たちは、ミリング警部補らが来ることを知ると、警察バラックの外に出てフィーニアンへの銃撃を開始した<sup>102)</sup>。

応援部隊の到着はフィーニアンにとって大打撃であったことは間違いないが、それ以上にフィーニアンは戦意を挫いた出来事があった。それは、マッセー准将がリムリック・ジャンクション駅で逮捕されたという知らせを携えた密使が午前8時から9時の間に到着したことである。その場にいたフィーニアンは「万事休す」だと思ったという。さらに、その直後に1名のフィーニアンが警官の銃撃を受け死亡したという事実が彼らをいっそう落胆させた。そこでフィーニアンは、今後採るべき行動について協議し、ダン大尉の助言に従って、撤退することを決定したという<sup>103)</sup>。午前10時にフィーニアンは銃撃を中止し、撤退していった。この銃撃戦で3名のフィーニアンが命を落としている<sup>104)</sup>。リムリックからキルマロックに派遣された警官が13人を逮捕している<sup>105)</sup>。多くのフィーニアンは逮捕を

免れたのである。

コークのフィーニアンの蜂起は3月5日夜から翌6日朝にかけて決行されたが、ほぼ1日で終わった。蜂起直後から警察は、バリーノッケインの警察バラックやノッカドゥーンの沿岸警備隊基地への攻撃などに参加したフィーニアンの逮捕に全力を尽くした。だが、多くのフィーニアンは逮捕を免れ、逮捕者の多くもまたその後釈放されている。そうしたなかで1867年5月にコーク市において、蜂起に関係したフィーニアンにかんする特別裁判が開催され、63名が裁かれたのである。「大逆罪」で死刑判決を受けたのは、ノッカドゥーンの沿岸警備隊基地の攻撃に参加したマックルーア大尉やエドワード・ケリー、デイヴィッド・ジョイス (David Joyce)、トマス・カリナンの4名と、バリーノッケインの警察バラックを攻撃したJ・F・X・オブライエンであった。だが、アイルランド社会を広範囲に巻き込んだ減刑運動がおこり、彼らはいずれも終身懲役刑に減刑された。コークのフィーニアン司令官だったコンドン大尉とマンスター地方の代表としてアイルランド共和国臨時政府に参加したドミニック・マホニーは「反逆的重罪」で裁かれたが、無罪となっている。キルマロックの警察バラックを攻撃したフィーニアンは、リムリック市で6月に開催された特別裁判で裁かれたが、いずれも死刑判決は受けておらず、指揮官だったダン大尉は逮捕されなかった<sup>106)</sup>。裁判にかけられた多くのフィーニアンは、「武器取締法」に違反した罪状で短期間の懲役・禁固刑を科せられたにすぎなかった。いずれにせよ、蜂起に参加した大多数のフィーニアンは逮捕もされず自宅に戻っていったのである。

## おわりに

なぜ蜂起は失敗したのだろうか。フィーニアンの武装状態が、イギリス軍やアイルランド警察に比べて格段に劣っていたことは事実である。フィーニアン指導者もこの点を十分理解しており、正攻法でイギリス軍を撃破することなど考えていなかった。そこで彼らが策定した作戦は、蜂起を「ゲリラ戦」と「正規戦」という二段階に分けて戦うということだった。ゲリラ戦を少なくとも3カ月間継続させれば、アイルランド系アメリカ人が遠征隊を派遣するとともに、ゲリラ戦を正規戦へと移行することができると考えていた。ところが、フィーニアンは正規戦の前段階であるゲリラ戦そのものを継続させることができず、蜂起はほぼ一日で終わってしまった。フィーニアン蜂起失敗の原因は、なぜフィーニアンはゲリラ戦を継続できなかったのかということを説明することによって、明らかにすることができる。このことをコークの蜂起に即して明らかにしてみよう。

蜂起計画の策定に深く関わったファリオラ少将は、蜂起失敗の最大の原因を最高司令官



代理マッセー准将の作戦指導がひきおこした「混乱」に帰している。そこでまず蜂起直前から決行までのマッセー准将の行動をみることからはじめよう<sup>107)</sup>。蜂起を指揮することを要請されたファリオラ少将は、マッセー准将と会うために3月1日にコーク市へ到着した。翌2日、彼がマッセー准将と面会したところ、マッセー准将が当初の蜂起計画とは食い違った作戦指導をおこなっていたことに気付いた。すなわち当初の計画ではフィーニアンは15名から20名の小集団でゲリラ戦を開始し、アイルランドを不安定な状態に陥れることを目論んでいたが、マッセー准将はこのゲリラ戦計画を無視したのである。そしてリムリック・ジャンクション駅にできるだけ多くのフィーニアンを集合させ大規模な勢力にまとめあげたうえで、リムリック市に向かって行進させ、外部からの攻撃によってリムリック市を占領する作戦を指令していたのである。じじつ、マッセー准将は、リムリック・ジャンクション駅にできるだけ多くのフィーニアンを集合させ、クリュズレ將軍の到着を待とうとしたと裁判で証言している<sup>108)</sup>。あくまでもゲリラ戦を実行しようとしたファリオラ少将にとっては、マッセー准将の作戦は論外であった。

この事態に驚いたファリオラ少将はすでに遅いとは思いながらも、マッセー准将の作戦指導を少しでも修復しようと、可能なかぎりの指示をマッセー准将に与えた。4日夕方、マッセー准将はファリオラ少将の指示をリムリックや他の場所に伝えたとき少将に告げた。こうした作戦指導は、蜂起直前の組織を混乱させたことは想像に難くない。じっさい、ファリオラ少将によれば、ゲリラ戦を遂行することが任務であると知らされていた指揮官のなかには、マッセー准将の作戦命令によって混乱し、自分たちのなすべきことがわからなくなってしまった者がいたという。さらに、マッセー准将は最後の瞬間まで指揮官を移動させるという支離滅裂の命令を出した結果、指揮官がいない部隊が現れたり、指揮官がいないことを理由に蜂起への参加を拒否したグループがあったというということである<sup>109)</sup>。

結局、ファリオラ少将はマッセー准将の作戦指導に翻弄されながらも蜂起に参加することになった。4日夕方マッセー准将はファリオラ少将に、蜂起当日の5日にリムリック・ジャンクション駅で落ち合い、その後ティペラリーの主力部隊と接触するので、5時半の汽車に乗るように伝えた。この言葉を残してマッセー准将は4日コーク市を後にしてリムリック・ジャンクション駅に向かった<sup>110)</sup>。そしてマッセー准将は逮捕されたのである。蜂起当日、ファリオラ少将はマッセー准将が逮捕されたことも知らず、リムリック・ジャンクション駅に到着した。そこでファリオラ少将がみたものは、スパイのコリドンからの情報によってこの駅がフィーニアンの集合地点であることを知らされていた治安当局によって派遣されたイギリス軍兵士たちだった。彼がたどり着いたホテルにはイギリス軍将校たちが滞在していた。ファリオラ少将は冷たい風が強く吹いているなか、ホテルを度々



抜け出し駅に向かったが、フィーニアンは来なかったという。ファリオラ少将はその後ロンドンで逮捕されている<sup>111)</sup>。

ファリオラ少将はマッセー准将の作戦指導にこそ蜂起失敗の原因があると主張しているが、失敗の原因はマッセー准将の作戦指導だけではなかったことを次に説明したい。このことをコーク市とコーク州東部に分けて検討することにしよう。コークにおける蜂起の参加者が最大であったグループは、マローに向かって北上し、その途中バリーノッケインの警察バラックを攻撃した、J・F・X・オブライエンに率いられたフィーニアンだった。このグループは一見すると、マッセー准将の作戦計画にあるリムリック・ジャンクション駅を目指した行動をとったように見える。しかし、目的地はあくまでも武器庫があると噂されていたマローであってリムリック・ジャンクション駅ではなかった。さらに、前述したように、コーク市を指揮する予定であった2名のアメリカ人将校マッケイ大尉とマイケル・オブライエン大尉はその場にいたにもかかわらず、指揮をとろうとしなかった。そこでオブライエンがやむを得ず指揮官となったのである。そしてバリーノッケインの警察バラックへの攻撃も計画された行動ではなかった。

前述したように、マッセー准将はコークのフィーニアン指導者マホニーに、コーク市では即座に蜂起を決行せず、市内の銃砲店から銃を強奪し、武装を強化する計画を伝えた。したがって、プレーヤー・ヒルに集合したフィーニアンは、マッセー准将の計画ではコーク市内の銃砲店を襲い武器を奪い、その後コーク市の攻撃を担当したグループであったと推測できる。あるいは、その集合した人数の多さから考えて、コーク市の郊外でゲリラ戦を展開し、市内への攻撃を側面から支援するグループであったとも考えられる。とはいえ、彼らのもとには指揮官が現れなかったので、彼らがどのような行動を計画していたのかはわからないのである。ところでこの指揮官とは誰だったのであろうか。蜂起後のフィーニアンの裁判のなかで、ファリオラ少将はコークにおける蜂起の詳細な計画を立案するためにコーク市に派遣され、さらに全体の蜂起から1週間後に決行されるコーク市の蜂起に参加する予定であったことが明らかにされている<sup>112)</sup>。そうであれば現れなかった指揮官とはファリオラ少将ということになる。

ところが、すでにみたようにファリオラ少将は、蜂起当日リムリック・ジャンクション駅に向かっており、しかもコーク市の蜂起を計画していたという証拠は存在しない。さらに、マッセー准将はファリオラ少将にリムリック・ジャンクション駅に来るように伝えていた。マッセー准将の作戦指導がコーク市のフィーニアンを混乱に陥れたことは間違いがないが、ファリオラ少将の行動もまた、コーク市のフィーニアンを蜂起失敗へと導いていったと結論づけることができる。その結果、プレーヤー・ヒルに集合したフィーニアン

は蜂起において何の役割を与えられないまま、マローへの無用な行進をはじめたのである。

コーク州東部のフィーニアンはどのように説明できるだろうか。この地域のフィーニアンはコーク市内への攻撃を側面から支援する役割を担っていたかもしれない。彼らがゲリラ戦を継続できなかった理由は、キャッスルマター警察バロックを攻撃したミドルトンのグループと、ノッカドゥーンの沿岸警備隊基地を攻撃したマックルーア大尉のグループがキラーでの集合に失敗したことであるといえよう。そのため、ノッカドゥーンの沿岸警備隊基地の襲撃に成功したことも意味のないものになってしまった。このような事態を招いた原因はいくつか考えられる。まずコーク州全域あるいはコーク州東部の司令官のコンドン大尉が3月2日にコーク市内において逮捕されてしまったことである。彼の逮捕が、蜂起計画を大幅に狂わせてしまったことは容易に想像がつく。さらに、スパイのコリドンがミドルトンのフィーニアンを指揮する計画であったにもかかわらず、任務を放棄し、一般人のデイリーがグループを率い、その彼が射殺されてしまったことも見逃すことはできない。マッセーの作戦指導の混乱がフィーニアンをキラーでの集合に混乱を招いた可能性も排除できないが、指揮官を失ったグループが計画を遂行できなかったとも考えられるのである。

コーク州の他の地域ではどうであったのだろうか。ファーモイでは3月6日に80名のフィーニアンが集合したが、他のグループが現れなかったので解散したという<sup>113)</sup>。コーク市のフィーニアンが武器庫があると考え目指したマローでは、ジェームズ・モラン大佐が指揮する予定であったが、6名しか現れず、彼らはカンタークに行き一晩過ごした後、コーク市に行き蜂起が失敗したことを知ったという<sup>114)</sup>。ミルストリートでは、3月5日の深夜、5名のフィーニアンがマウントリーダーにある屋敷を襲い、武器を奪っている<sup>115)</sup>。ミルストリートのフィーニアンが蜂起のさいにおこなったことは、この屋敷への攻撃だけである。これらの地域のフィーニアンはメンバーの動員そのものを満足におこなうことができなかった。この失敗の原因はマッセー准将の作戦指導による混乱が原因であったといえるかもしれない。

ところで治安当局はスパイの情報によってフィーニアンの行動をある程度はおさえていたが、蜂起への対応が完全であったのではない。バリーノッケインの警察バロックやノッカドゥーンの沿岸警備隊基地はフィーニアンに攻略されてしまった。また、治安当局が戦闘においてフィーニアンを撃破し、蜂起を終わらせたのでもなかった。ゲリラ戦がなぜ継続できなかったのかという問題を設定してみると、蜂起失敗の原因はフィーニアンの側にあったことがよくわかる。蜂起計画は決して綿密に練られたものではなく、計画の立案者クリュズレ将軍も勝算があるとは思っていないほど杜撰であった。さらにマッセー准将が

混乱した作戦指導をおこなったのである。そうしたなかでコンドン大尉の逮捕が混乱に拍車をかけ、マッセー准将の逮捕が蜂起に終止符を打った。だが、蜂起失敗の背景にはフィーニアンの最高司令官クリュズレ將軍はアイルランドに来ることもなく、彼の副官だったファリオラ少将が蜂起中止を模索したことからもわかるように、ケリー大佐を頂点とするアメリカ人将校が蜂起を強引に実行しようとしたことがあった。フィーニアンは自滅していったのである。

蜂起は失敗したとはいえ、フィーニアンたちは活動を続けた。彼らは、逮捕されたケリー大佐を1867年9月にマンチェスターにおいて救出するさいに一名の警官を射殺し、同年12月にロンドンのクラークンウェルの刑務所に収監されていた仲間を救出することを目的として刑務所を爆破したさいに、付近の住民を巻き添えにし、多数の死傷者を出してしまった<sup>116)</sup>。イギリス本国でおこしたこれらの事件は、蜂起とは比較にならないほどイギリス人やイギリス政府に衝撃を与えた。また、フィーニアンは蜂起失敗から学んだことがある。それは、イギリスが他国と戦闘状態にあるような「危機」が生じない限り、蜂起の成功は望めないということだった。そこで彼らは武装をすすめながら、新たな蜂起の機会を待つことになった。とはいえ、メンバーのなかには即時に行動をおこそうとするグループが生まれ、1882年5月にはアイルランド担当大臣フレデリック・カヴァンディッシュ(Frederick Cavendish)卿とアイルランド担当次官T・H・バーク(T.H. Burke)を暗殺し<sup>117)</sup>、1881年から87年にかけてイギリスの諸都市で「ダイナマイト・キャンペーン」を展開しイギリス議会も爆破している<sup>118)</sup>。このようなフィーニアンの活動はイギリス人やイギリス政府に不安を与え続けるとともに、イギリス政府の統治能力に疑問を投げかけたのである。こうしたなか、ウィリアム・グラッドストン(William Gladstone)は第一次自治法案(1886年)、第二次自治法案(1893年)を下院に提出したが、成立には至らず、アイルランドの統治構造を変更することはできなかった。1914年にはじまった第一次世界大戦はイギリスに「危機」をもたらした。そこでフィーニアンは1916年に再び蜂起したのである。蜂起失敗から約半世紀がたった。

## 注

- 1) ダブリンの蜂起については、拙著『大英帝国のなかの「反乱」(第二版)』同文館、2005年を参照。本稿の作成にあたっては大阪学院大学の武井章弘氏の助言を参考にした。感謝の意を表したい。
- 2) Walter McGrath, 'The Fenian Rising in Cork', *The Irish Sword*, vol. 8, 1967-68, pp. 245-54.
- 3) *Evening Echo*, 2 Mar., 3 Mar., 6 Mar., 7 Mar. 1967.

- 4) L. Ó Broin, *Fenian Fever: An Anglo-American Dilemma*, New York: New York University Press, 1971, p. 157. オブロインは 'Fenianism, Cork and Limerick in 1867: lecture to Cork Old I.R.A.' という講演を1958年におこなったと考えられ、その原稿が National Library of Ireland (以下 N.L.I. と略す) に所蔵されている (Ó Broin Papers, MS 27958)。
- 5) N.L.I., J.F.X. O'Brien Papers, MS 16695 (以下 MS 16695 と略す)。彼の『回想録』は, *For the Liberty of Ireland at Home and Abroad: the Autobiography of J.F.X. O'Brien*, ed. by Jennifer Regan-Lefebvre (ed), Dublin: University College Dublin, 2010として出版されている。
- 6) John Devoy, *Recollections of An Irish Rebel*, Shannon: Irish University Press, 1969, p. 207. デヴォイの『回想録』については、拙稿「フィーニアン蜂起(1867年)とJ・デヴォイの回想録」『三田学会雑誌』86巻3号, 1993年12月, pp. 78-92を参照。
- 7) *Cork Special Commission, 1867*, n.p. [1867] (以下 C.S.C. と略す), p. 119; William D'Arcy, *The Fenian Movement in the United States: 1858-1886*, New York: Russell & Russell, 1971, p. 221.
- 8) N.L.I., Larcom Papers, MS 7517, pp. 218-9; *Irishman*, 12 Sept. 1868; Leon Ó Broin, *Fenian Fever*, 1971, pp. 89, 124.
- 9) General Cluseret, 'My Connection with Fenianism', *Frazer's Magazine*, July 1872, p. 35.
- 10) General Cluseret, 'My Connection with Fenianism', p. 39; *Irishman*, 12 Sept. 1868.
- 11) *Irishman*, 22 Aug., 29 Aug. 1868.
- 12) *Irishman*, 12 Sept. 1868; 拙著『大英帝国のなかの「反乱」』, pp. 221-2.
- 13) *Irishman*, 10 Oct. 1868. また、マッセー准将は、ダブリンの蜂起の司令官ハルピン将軍には、ダブリンの蜂起が失敗した場合にはウィックロー山地に移動し、イギリス軍がダブリンからリムリック・ジャンクション駅に向かう動きを脅かすように命令している (National Archives of Ireland (以下 N.A.I. と略す), Fenian Briefs, 7, p. 8.)。
- 14) *County of Limerick Special Commission*, n.p. [1867] (以下 C.L.S.C. と略す), p. 16.
- 15) *Irishman*, 12 Sept. 1868.
- 16) 拙著『大英帝国のなかの「反乱」』218-9頁。
- 17) IRB の組織は820名からなるサークルを基礎単位とし、サークルの統率者をセンターと呼んだ。
- 18) C.S.C., pp. 120-1. 人数についてはコーク市は6000名から7000名、市を含めたコーク州全体では2万名という情報もある (N.A.I., Fenian Briefs, 6 (C), p. 20; N.A.I., Fenian Briefs, 7, p. 9).
- 19) N.A.I., Fenian Briefs, 7, p. 15.
- 20) C.S.C., p. 121.
- 21) N.A.I., Fenian Briefs, 7, pp. 9-10; C.S.C., p. 122.
- 22) N.A.I., Fenian Briefs, 7, pp. 9, 10, 14.
- 23) N.A.I., Fenian Briefs, 7, p. 7および Devoy, *Recollections* から名前と階級を補った。
- 24) N.L.I., Larcom Papers, MS 7517, p. 236. 彼のスパイとしての信頼性を高めたのは、1867年

2 月にイングランドにいたアメリカ人将校たちがチェスターの兵器庫を襲撃する計画を治安当局に報じ、彼らの意図を挫いたことである。

- 25) C.S.C., p. 128.
- 26) N.A.I., Fenian Briefs, 7, p. 11.
- 27) Curley to Sub Inspector (以下 S.I. と略す) Thomas Hamilton, 3 Mar. 1867 (Public Record Office of Northern Ireland, D/901/1).
- 28) N.A.I., Fenian Briefs, 7, p. 12.
- 29) Brownrigg to -, 27, 28 Feb. 1867 (N.L.I., Larcom Papers, MS 7593).
- 30) N.A.I., Fenian Briefs, 7, pp. 10-1.
- 31) S.I. Hamilton to Inspector General of Police, Irish Constabulary (以下 I.G.P. と略す), 4 Mar. 1867 (F 2651 on N.A.I., Chief Secretary's Office: Registered Papers (C.S.O., R.P. と略す) 1867/11441) ; S.I. Hamilton to I.G.P., 4 Mar. 1867 (F Papers, F 3223 on N.A.I., C.S.O., R.P. 1867/3888).
- 32) C.S.C., p. 127; Larcom to Lord Naas, 4 Mar. 1867 (N.L.I., Mayo Papers, MS 11191 (5)) ; *Fenian Fever*, pp. 145-6.
- 33) Larcom to Lord Naas, 1 Mar. 1867 (N.L.I., Mayo Papers, MS 11191 (5)).
- 34) Larcom to Col. Curzon, 3 Mar. 1867 (N.L.I., Larcom Papers, MS 7594).
- 35) Resident Magistrate (以下 R.M. と略す) Cronin to Under Secretary (以下 U.S. と略す), 5 Mar. 1867 (N.A.I., C.S.O., R.P. 1867/3630 on 1867/3888) ; Mayor of Cork, Lyons to -, 5 Mar. 1867 (N.A.I., C.S.O., R.P. 1867/3630 on 1867/3585).
- 36) *Cork Examiner*, 6 Mar. 1867; *Cork Daily Herald*, 6 Mar. 1867.
- 37) C.S.C., p. 137; *Cork Examiner*, 23 Mar. 1867.
- 38) MS 16695, p. 144.
- 39) MS 16695, pp. 146, 148.
- 40) *Cork Examiner*, 8 Mar. 1867.
- 41) MS 16695, p. 148.
- 42) MS 16695, p. 147.
- 43) MS 16695, p. 148.
- 44) C.S.C., pp. 137-8, 144; *Cork Examiner*, 23 Mar. 1867.
- 45) R.M. F.F. Ryan to U.S., 26 Mar. 1867 (N.A.I., C.S.O., R.P. 1867/5370 on 1867/6541).
- 46) この人数については、500名という情報もある (*Cork Examiner*, 7 Mar. 1867)。
- 47) C.S.C., p. 145; *Cork Examiner*, 23 Mar. 1867.
- 48) この列車はすでにブラックプール駅を過ぎたところで、線路が持ち上げられ、丸太が置かれていたという状況に遭遇しており、線路を修復したうえでラスダフ駅に向かっていたのである (*Cork Examiner*, 7 Mar. 1867)。
- 49) *Cork Examiner*, 7 Mar. 1867.
- 50) MS 16695, p. 151; *Cork Examiner*, 23 Mar. 1867.

- 51) MS 16695, p. 151.
- 52) C.S.C., pp. 146, 148.
- 53) MS 16695, p. 152.
- 54) MS 16695, p. 154.
- 55) C.S.C., p. 146.
- 56) MS 16695, p. 157.
- 57) MS 16695, p. 157.
- 58) C.S.C., p. 159; *The Weekly Herald*, 9 Mar. 1867.
- 59) *Cork Examiner*, 7 Mar. 1867.
- 60) MS 16695, pp. 157-8.
- 61) *Cork Examiner*, 23 Mar. 1867.
- 62) C.S.C., p. 140.
- 63) *Cork Examiner*, 7 Mar. 1867.
- 64) *Cork Examiner*, 23 Mar. 1867.
- 65) C.S.C., pp. 227, 239.
- 66) *The Weekly Herald*, 9 Mar. 1867.
- 67) C.S.C., pp. 231, 239.
- 68) *Cork Examiner*, 7 Mar. 1867.
- 69) 'Memorandum of Brief Particulars Respecting the Recent Attacks upon Constabulary Barracks by Bands of Armed Fenians on the Night of the 5<sup>th</sup> March 1867' (N.A.I., C.S.O., R.P. 1867/4783) ; *Cork Examiner*, 7 Mar. 1867.
- 70) *Cork Examiner*, 7 Mar. 1867.
- 71) *Cork Examiner*, 7 Mar. 1867.
- 72) 2<sup>nd</sup> Head Constable Peter Goulden to I.G.P., 5 Mar. 1867 (N.A.I., F Papers F 2707) ; *Southern Reporter*, 7 Mar. 1867; *Southern Reporter*, 7 Mar. 1867.
- 73) *Cork Examiner*, 7 Mar. 1867.
- 74) 'The Voluntary Statement of Daniel Doyle' (N.A.I., C.S.O., R.P. 1867/6411) ; C.S.C., p. 248.
- 75) 2<sup>nd</sup> Head Constable Peter Goulden to I.G.P., 5 Mar. 1867 (N.A.I., F Papers, F 2707) ; C.S.C., pp. 253-4; *Southern Reporter*, 7 Mar. 1867.
- 76) 2<sup>nd</sup> Head Constable Peter Goulden to I.G.P., 5 Mar. 1867 (N.A.I., F Papers, F 2707) ; N.L.I., Larcom Papers MS 7517, p. 271.
- 77) 2<sup>nd</sup> Head Constable Peter Goulden to I.G.P., 5 Mar. 1867 (N.A.I., F Papers, F 2707) ; *Cork Examiner*, 7 Mar. 1867.
- 78) Devoy, *Recollections*, p. 213; N.A.I., Fenian Briefs, 7, p. 12; MS 27958, p. 9.
- 79) Devoy, *Recollections*, p. 214.
- 80) C.S.C., p. 181.



- 81) Devoy, *Recollections*, p. 214.
- 82) *Reports of Proceedings at the Special Commission, (1867), for the County and City of Cork, and the County and City of Limerick*, Dublin, 1867 (以下 *R.P.S.P.* と略す), p. 111-2. ケリーは3月2日にミドルトンへ行き, 3日にはキリーを経由してバリーマコーダへ行った。そしてヨールへ行く命令を受けた。4日にはケリーはヨールに行ったようであり, マックルーア大尉からそこに留まり, 彼と共同行動をとるように命令を受けた。蜂起決行日の5日午後11時15分にヨールを出発し, 6日に彼は13名の仲間とともにキリーまで行進し, マックルーア大尉と合流しその指揮下に入ったのである (*C.S.C.*, p. 221)。
- 83) *R.P.S.P.*, p. 89.
- 84) *R.P.S.P.*, pp. 89, 112, 114.
- 85) *R.P.S.P.*, p. 90; *Cork Examiner*, 7 Mar. 1867.
- 86) Thomas Miller, Captain and Senior Naval Officer Royal George to U.S., 8 Mar. 1867 (N.A.I., C.S.O., R.P. 1867/3835) ; *C.S.C.*, pp. 185, 187, 191; *R.P.S.P.*, p. 90; Devoy, *Recollections*, p. 214; *Cork Examiner*, 7 Mar. 1867.
- 87) *C.S.C.*, p. 182.
- 88) Devoy, *Recollections*, p. 214.
- 89) *C.S.C.*, p. 221.
- 90) 拙著『大英帝国のなかの「反乱」』を参照。
- 91) Devoy, *Recollections*, pp. 214-6; MS 7517, pp. 282-3; R.M. N. Browne to U.S., 16 Apr. 1867 (N.A.I., C.S.O., R.P. 1867/6822 on 1867/8371) ; R.M. H. Redmond to C.S. and U.S., 31 Mar. 1867 (N.A.I., C.S.O., R.P. 1867/5647 on 1867/9163); R.M. N. Browne to U.S., 1 Apr. 1867 (N.A.I., C.S.O., R.P. 1867/- on 1867/9163). Crowley の葬儀には多くの人が参列した (N.A.I., C.S.O., R.P. 1867/16575を参照)。
- 92) キルマロックの警察バラックの攻撃については, Mainchin Seoighe, 'The Fenian Attack on Kilmallock Police Barracks', *North Munster Antiquarian Journal*, 10, 1966-7, pp. 157-68があるが, 概略的である。
- 93) *C.S.C.*, p. 83; *Cork Examiner*, 9 Mar. 1867.
- 94) *C.S.C.*, p. 83.
- 95) M. Seoighe, 'The Fenian Attack on Kilmallock Police Barracks', p. 161.
- 96) *Cork Examiner*, 7 Mar. 1867.
- 97) *Cork Examiner*, 7 Mar. 1867.
- 98) M. Seoighe, 'The Fenian Attack on Kilmallock Police Barracks', p. 161.
- 99) R.M. N. Browne to U.S., 16 Mar. 1867 (N.A.I., C.S.O. R.P. 1867/4733).
- 100) *C.S.C.*, p. 83; *Cork Examiner*, 12 Mar. 1867.
- 101) 'Memorandum of Brief Particulars Respecting the Recent Attacks upon Constabulary Barracks by Bands of Armed Fenians on the Night of the 5<sup>th</sup> March 1867 (N.A.I., C.S.O., R.P. 1867/4783) ; Sub Inspector O. Milling to I.G.P., 21 Mar. 1867 (N.A.I., F Papers, F 3306 on F

- 3461) ; *Cork Examiner*, 12 Mar. 1867.
- 102) C.S.C., p. 83; *Cork Examiner*, 12 Mar. 1867.
- 103) Devoy, *Recollections*, pp. 226-7.
- 104) 'Memorandum of Brief Particulars Respecting the Recent Attacks upon Constabulary Barracks by Bands of Armed Fenians on the Night of the 5<sup>th</sup> March 1867'.
- 105) R.M. Oliver Moriarty to U.S., 6 Mar. 1867 (N.A.I., C.S.O. R.P. 1867/3575).
- 106) N.L.I., Larcom Papers, MS 7517, pp. 288-9; N.A.I., F Papers, 5246R; McGrath, *Rising*, p. 253.
- 107) Octave Fariola to Anthony Griffin, Chief Executive IR in America, 29 Mar. 1867, in O' Donovan Rossa Papers (microfilm, County Cork Library).
- 108) N.A.I., Fenian Briefs, 6 (c), p. 24.
- 109) Fariola to Griffin, 29 Mar. 1867.
- 110) Fariola to Griffin, 29 Mar. 1867.
- 111) *Irishman*, 10 Oct. 1868; Ó Broin, *Fenian Fever*, p. 200.
- 112) N.A.I., Fenian Briefs, 7, pp. 9, 14.
- 113) Sub Inspector J. Corr to I.G.P., 13 Mar. 1867 (N.A.I., F papers, F 3053 on C.S.O. R.P. 1867/14568)
- 114) Devoy, *Recollections*, p. 210.
- 115) C.S.C., pp. 16, 266-7, 270.
- 116) Patrick Quinlivan and Paul Rose, *The Fenians in England 1865~1872*, London: John Calder Ltd., 1982.
- 117) Tom Corfe, *The Phoenix Park Murders: Conflict Compromise & Tragedy in Ireland 1879-1882*, London: Hodder and Stoughton, 1968; Sean Moloney, *The Phoenix Murder: Conspiracy, Betrayal and Retribution*, Dublin: Mercier Press, 2006.
- 118) K.R.M. Short, *The Dynamite War: Irish-American Bombers in Victorian Britain*, Dublin: Gill & Macmillan, 1979; Niall Whelehan, *The Dynamiters: Irish Nationalism and Political Violence in the Wider World, 1867-1900*, Cambridge: Cambridge University Press, 2012. また, Brian Jenkins, *The Fenian Problem: Insurgency and Terrorism in A Liberal State*, Montréal: McGill-Queen's University Press, 2008; Jonathan Gantt, *Irish Terrorism in the Atlantic Community, 1865-1922*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010を参照.

## The Fenian Rising in Cork, March 1867

TAKAGAMI Shinichi

**Key Words :** The Irish independence movement, Irish-Americans, Fenian, Rising

### Abstract

The Irish Republican Brotherhood (I.R.B.) established in 1858, started risings in Dublin, Cork, Limerick and Tipperary. This paper examines the rising in Cork City and County Cork.

In terms of their known activities on the night set for the rising, the Cork Fenians can be classified into four elements. First, a large force of Fenians, which assembled outside the city and was going to Mallow, attacked the police barrack at Ballyknockane. Secondly, a group, consisted mainly of Midleton Fenians led by Timothy Daly, attacked the police barrack at Castlemartyr. Thirdly, a group under the leadership of Captain John McClure attacked the coastguard station at Knockadoon and aimed to cooperate with the Midleton Fenians. A fourth element was the Charleville Fenians commanded by Captain John Dunne: they attacked the police barrack at Kilmallock with Fenians in Limerick.